

【書評】

岡崎 誠司著『見方考え方を成長させる社会科授業の創造』

(風間書房, 2013) 2,000円

馬野 範雄

(大阪教育大学)

指導要録における観点別評価が、「思考・判断」から「思考・判断・表現」に改訂されている。多様な見方・考え方を重視するとともに、その内容や根拠を表現する力が求められている。本書は、社会的見方・考え方の深まりを成長ととらえ、単元レベルで必要な知識とその関連を構造的に示しながら、具体的な実践に基づいて解説している。まさに理論と実践を一体化した実践的研究の典型的な書となっている。本書のプロットは、次のような構成になっている。

はじめに

- I 社会的見方・考え方を成長させる内容の確定
 - 1 「社会科授業の目的」から考える内容
 - 2 社会的見方・考え方を成長させる内容の選択
- II 社会的見方・考え方を成長させる方法の確定
 - 1 「社会科授業の目的」から考える方法
 - 2 社会的見方・考え方を成長させる方法の選択
- III 社会的見方・考え方を成長させる授業モデル
信長から家康へ勝頼へ視点を移動しよう！
- IV 社会的見方・考え方を成長させる授業の実際
 - 1 知的好奇心から探求し地域社会の問題を考える単元構成
 - 2 If-then 発問による仮説吟味でフードシステムを探求する
 - 3 「分業」概念を習得する農業単元から活用する工業単元へ
 - 4 合理的判断能力の育成をめざす歴史的社会問題の教材化

岡崎氏は図1のように、社会的見方・考え方の成長を、社会的見方・考え方の拡がり和社会見方・考え方の深まりという2軸からとらえ、次のような階層的な知識の構造を位置づけている。

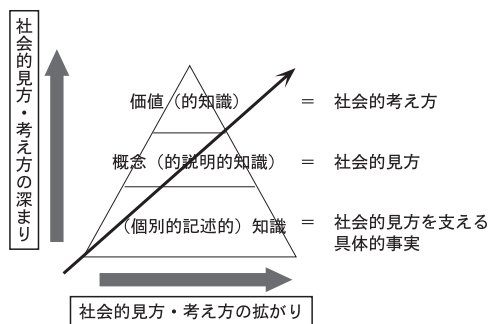


図1 社会的見方・考え方の成長モデル

- A-1 具体的事実(知識)
- A-2 社会的見方(概念)
- A-3 社会的考え方(価値)

この成長モデルが、単元開発や単元構成にあたって一貫した考え方になっている。

この見方・考え方を成長させるための方策として、学習過程と指導の工夫(活動の構成)を提示している。

学習過程では、次のような3種類の「探求のプロセス」を示している。

- B-1 判断のための探求
- B-2 「なぜ」からの探求
- B-3 知ることから探求

また、指導の工夫(活動の構成)として、次のような10種類の方法を紹介している。

- C-1 イメージ化
- C-2 視点移動
- C-3 討論
- C-4 学習内容に直結する資料の提示
- C-5 知的好奇心から探求し地域社会の問題を考える単元構成
- C-6 If-then 発問による仮説吟味
- C-7 単元相互の接続
- C-8 歴史的社会問題の探求・評価過程で単元

をつくる

C-9 一つの事象を複数の視点から解釈しよう

C-10 歴史的事象を評価する

このように、問題解決的な学習過程（探求過程）といっても、単元構成や活動の構成には多様な手法がある。指導者はこれらの手法を身に付け、児童・生徒の実態と単元（教材）の目標や内容に応じて、授業を構成していくことが求められているのである。

これらの授業の構造や手法については、次のような事例を通して具体的に説明されている。

- (1) 6年「織田信長」
- (2) 3年「広島菜をつくる」
- (3) 4年「わたしたちの県－広島菜2－」
- (4) 5年「牛肉をつくる」「自動車をつくる」
- (5) 6年「近代化する社会－自由民権・国会開設問題－」

ここではすべての実践を紹介することはできないが、最初に「なるほど」「おもしろい」と感じた6年「織田信長」の実践を紹介してみたい。

織田信長の実践は、長篠の合戦図を見て、信長の鉄砲の数が勝利の要因であり、信長の先進的な発想と実行で全国統一が進んでいくことをとらえていくことが多い。しかし岡崎実践は、次のような問題の構成と、きめ細かな指導によって、見方・考え方の成長を図っているのである。

- (1) 「なぜ、織田信長は武田軍に勝つことができたのでしょうか」

ここでは、信長は武田軍の後方にも軍を派遣し、武田軍が織田・徳川連合軍に突撃せざるを得ないようにしていたことなどを追究している。先に記述した探求プロセス B-2に基づいた学習過程を構成し、A-1、A-4といった手法を活用して、単に鉄砲の優位性に着目するだけでなく、連合軍の兵の多さや作戦にも視野を広げ、勝利の要因としての見方・考え方の成長を図っている。

- (2) 「なぜ、徳川家康は武田勝頼ではなく、織田信長に味方したのでしょうか」

C-2、C-3、C-9といった手法を活用し、織田、徳川、武田の歴史的背景や位置関係、軍事力・経済力にも気付くように配慮し、多様な理由から徳川は織田に味方したということをとらえるように

している。

- (3) 「甲斐の城に帰った武田勝頼は、これからどうしたらよいでしょうか」

C-2、C-3、C-8、C-9、C-10などの手法を活用し、軍備や資金を蓄え、織田・徳川軍と再度戦うという感情的・短絡的な判断で終わるのではなく、上杉や北条と連合して織田・徳川と対峙するとか、織田氏の家来になって手柄をたて、占領した地域を領地としてもらうなど、長期的・広域的な視点から考えるようにしている。

このように、岡崎氏が言うところの「見方・考え方の成長」が子どもたちの具体的な発言やノートから実感できるように紹介されている。また、この実践にあたって、先に示された学習過程の構成や指導の工夫が具体的に示され、岡崎氏の仮説的に提示された手法の有効性が検証されている。

岡崎氏はその成果を、次のようにまとめている。

- (1) 社会的見方・考え方の成長過程がイメージ化することによって、子どもの成長を促し、評価することができた。
- (2) 子どもの視点から信長から家康へさらに勝頼へと移動させることを通して、子どもは主観的認識から客観的認識へと進み、さらに合理的判断ができるようになった。単なる知識から社会的見方へ社会的考え方へと成長し、また社会的見方（概念）を獲得することができた。
- (3) 社会的考え方を成長させるために、各自の判断を引き出し、お互いを吟味させる討論の有効性を明らかにできた。

以上のように、岡崎氏はこれまでの先行研究や自らの実践開発研究の成果をもとに、理論と実践の一体化を具現化している。研究者、あるいは実践者として、改めて次のような点を今後の研究・実践に活かしていきたいものである。

- (1) 見方・考え方の成長と知識の構造の関係
- (2) 地域、社会、歴史の素材の教材化にあたっての見方・考え方の構造図の活用
- (3) 探求プロセスのとらえ方や、授業構成のための手法の活用
- (4) 子どもの見方・考え方の評価